

第三章 漢文、和漢混淆文の読み方

武家文書や公式文書は漢文、あるいは漢文的表現を含む和漢混淆文が多い。語順の異なる漢文（中国語）を日本語として読み下すために工夫されたのが「訓点」である。

訓点 漢文を訓読の際、その読み方を示すために漢字の四隅、かたわらなどに書き加えた文字や符号の総称。

句読点

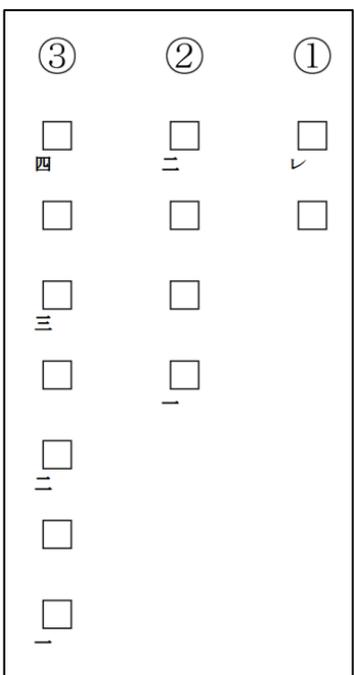
返り点（乎古止点）おことてん（とも）

送り仮名 など （課題文書 1-1 参照）

返り点

漢文を読む順番を示す記号。日本語とは語順が異なる漢文を日本語的に読むために工夫された記号。

し点、一三三四点、更に上中下点、甲乙丙点などがある。



し点 一字返読用の訓点を持つし点、または雁（かりがね）点（いじり）。すへ下の一字から返って読む。

読書 書を讀む
不_レ好_レ学 学を好まず

一ニ点 二字以上を隔てた文字に返って読むための符号、「一」を先に読み、「二」に戻って読む。

借_二寅_一威_一 寅の威を借る
被_二仰付_一 寅仰せ付けらる

し点と一ニ点の共用

不_レ可_レ有_二御座_一候 御座有るべからず候

文章によっては「一、二、三、四に加え、上、中、下など」も使われる。

上（中）下点

一ニ（三）点のついた部分を読んだ後に、上点のついた字、（次に中点のついた字を読み、）下点のついた字へ返る。

①⑥ ④② ③⑤
我知_ル下_下見_ル美_シキ鳥_ヲ一_者ヲ_上

我、美しき鳥を見る者を知る

（注）

- ・訓点などがつかない漢文を白文という。
- ・二字以上の熟語であることを示すために縦棒（一）ハイフン（）を用いることがある。

漢文の送り仮名や振り仮名にはカタカナを用いる。（課題文書1-1参照）

返読文字と再読文字

漢文的表現の中で、下から上に返って読む「返読文字」と、同じ字を二度にわたって読む「再読文字」を知っておく必要がある。

多くの古文書を読む過程で自然に身についていくものもある。

・返読文字

否定、使役、受身などで、漢文の句形の名残をとどめ、下から上に返って読む文字。

例

為	① 〓させ	
	② 〓のため	
	③ 〓として	
	④ 〓たる	
以	〓もって	以書付 書付をもって
依	〓により	依之 これにより
令	〓せしめる	
可	〓べく 〓べき	〓べし
致	〓いたす	
有	〓あり 〓ある	有之 これある、これあり
無	〓なし、〓なく	無之 これなく、これなし
於	〓において	於城中 城中において
被	〓られ 〓らる	(尊敬) 被仰 おおせられる
		(受身) 被書、被告、被写体
従	〓より	従是 これより

・再読文字

同じ字を二度にわたって読む字

自	〓より	自今 いまより
不	〓ず	不敬 うやまわず
非	〓にあらず	非常 つねにあらず
難	〓がたし	難有 ありがたし
易	〓やすし	
如	〓のごとく	如此 このごとく
雖	〓といえども	

未 いまダ〓 (セ) ず 【訳】 まだ〓 (シ) ない

現代語の「未定」：「いまだ定まらず」

「未熟」：「いまだ熟せず」

など、そのまま熟語になっている例が多い

当	まさニ〓 (ス) ベシ	当然
宜	よろシク〓 (ス) ベシ	適宜
須	すべからク〓 (ス) ベシ	必須
將、且	まさニ〓 (セ) ントす	
応、当	まさニ〓 (ス) ベシ	
猶、由	なホ〓ノヘガ〓ごとシ	
蓋	なんゾ〓 (セ) ざル	

置き字

漢文には、訓読するときには読まず、単に置いてあるように見える文字がある。これを「置き字」という。

置き字は、訓読する際には読まないが、単なる飾り文字などではなく、文の構造や文章の流れを構成するうえで重要な働きをする事がある。

主な置き字

「於」	音読	オ	訓読	おいて	おける
「于」	音読	ウ	ク	訓読	ここに ああ
「而」	音読	シ	訓読	しかして	しかも
				句と句をつなぐ接続詞のような働き	
「焉」	音読	エン	訓読	いづくんぞ	なんぞ
「矣」	音読	イ			
				文末で意味を添える終助詞のような働き	
				断定・感嘆などを表し、語調を強める働き。	
「乎」	音読	コ	訓読	かな	を
				他の語との関係を示す前置詞のような働き	

「者」①前の句が主格である事を示す用法

音読 ハ と読むか主題に「ハ」つけて

置き字扱い

②時を表す 音読 なし 昔者、古者、近者、今者 等

(課題文書11 4行目)

和漢混淆の文書例 例文9の2

この例文は明治維新直後の金沢藩の酒造免許に関する文書である。一見、漢文のように見えるが、和漢混淆文である

これをそのまま活字に置き変えた文を「書き下し文」という。

(書き下し文)

句読点のみ加えている

御一新以来諸株式追々御廃止相成候処酒造而己従前

ノ俣被立置候儀御趣意柄モ可有之ト奉存候ヘトモ右株

有之者近来物価騰貴ニ付中ニ八株高通リ造兼候者モ

有之候処新規ニ酒造相望候者モ林立ニ付難任其意族

モ御坐候元来飲食ノ品八人々ノ嗜不嗜モ御坐候ヘトモ

大体地方人員ト相当不仕候テハ自然他方ヨリ買求候

様相成米産多分ノ土地ニテハ不益ノ廉不少様奉存候

且仮令右株式御廃止ニ相成居候売捌方ノ目的無之候

テハ製造モ不仕理勢に御坐候間酒造株式総テ御差解

相成候トモ猥ニ酒造相増候儀ハ無御坐候哉ニ奉存候

間人々ノ財産ニ応ジ自由ニ製造候様相成候ハノ商民

融通ノ為ニモ可然奉存候依テ此段奉伺候以上

辛未正月十八日

金沢藩

弁官 御中

伺ノ趣不被聞届候事

基本的には和文であり、上から順に読んで行けば意味が通じるが、網掛の部分で行き詰まる。この部分が「漢文的表現」である。

このような「漢文的表現」を日本語的に読み下すため、「訓点」という手法が考え出された。上の例文の書き下し文に「訓点」と句読点を加えると、次のようになり、一段と読みやすくなる。

御一新以来、諸株式追々御廃止相成候処、酒造而己従前

ノ俛被^レ立置^レ候儀、御趣意柄^モ可^レ有^レ之^下奉^レ存候^{ヘトモ}右株

有^レ之^者、近来物価騰貴^ニ付、中^{ニハ}株高通^リ造兼候者^モ右株

有^レ之^候処、新規^ニ酒造相望候者^モ林立^ニ付、難^レ任^ニ其意^一族

御坐候。元來飲食ノ品^ハ人々ノ嗜^不嗜^モ御坐候^{ヘトモ}

大体^{シカタ}地方人員^ト相当^不仕候^{テハ}、自然^他方^{ヨリ}買求候

様相成、米産多分ノ土地^{ニテハ}、不益^ノ廉^不少^様奉^レ存候、

且、仮令^{タトエ}右株式御廃止^ニ相成居候^一売捌方ノ目的^無之^候

テハ、製造^モ不^仕理勢^ニ御坐候間、酒造株式總^テ御差解^{サントキ}

相成候^{トモ}、猥^ニ酒造相増候儀^ハ無^ニ御坐^一候哉^ニ奉^レ存候

間、人々ノ財産^ニ応^シ、自由^ニ製造候様相成候^ハ、商民

融通^ノ為^ニ可^レ然^奉存候、依^テ此段奉^レ伺候、以上

辛未正月十八日

金沢藩

弁官御中

伺^ノ趣、不^レ被^ニ聞届^一候事

この訓点の付加により、漢文的表現を日本語の語順で読むことができる。これを読み下し文という。

(読み下し文)

御一新以来、諸株式(は)追々御廃止相成り候処、酒造のみ従前の俛(に)立ち置かれ候儀、御趣意柄もこれあるべきと存じ奉り候へども、右株これある者、近来物価騰貴に付き、中には株高通り造り兼ね候者もこれあり候処、新規に酒造相望み候者も林立に付き、其意に任せがたき族も御座候。

元來飲食の品は人々の嗜・不嗜も御座候へども、大体^{シカタ}地方人員と相当仕らず候ては、自然^{じねん}他方より買求候よう相成り、米産多分の土地にては、不益^{カド}の廉^少なからざる様存じ奉り候。

且、仮令^{タトエ}右株式御廃止に相成り居り候^一売捌方^ノ目的^無これなく候ては製造も仕らざる理勢に御座候間、酒造株式すべて御差し解き相成り候とも、猥に酒造相増し候儀は御座なく候やに存じ奉り候間、人々の財産に應じ、自由に製造候様相成り候はゞ、商民融通の為にもしかるべくと存じ奉り候。

依て此段伺い奉り候。以上

辛未正月十八日

金沢藩

弁官御中

伺^ノ趣、聞き届けられず候事

* 「トモ」脱カ

演習問題

一 課題文書 9の1は明治改元の詔書です。

この文章に訓点を加えると左のようになります。

これを読み下し文にして下さい。

(漢文講義ではこれを書き下し文と呼ぶ)

元年九月八日

布告

今般御即位大禮被_レ為_レ濟、先例ノ通被_レ為_レ改_二年号_一候、就_テ

ハ是迄吉凶ノ象兆_二随_レヒ、屢改号有_レ之候_{ハトモ}、自今御_一

代_一号_二被_レ定候、依_レ之改_二慶応四年_一可_レ為_二明治元年_一旨被_二

仰出_一候事

明治元年九月八日

議政官 岩倉右兵衛督具視

(以下略)

二 課題文書10 鼠小僧白状記の四角で囲まれた部分は漢文的表現です。この部分に訓点を加えて下さい。

三 次の各文に、左側の「読み下し文」に従って返り点、送り仮名をつけてください。

① 可被成下候

なしくださるべく候

② 難有奉存候

ありがたく存じ奉り候

③ 不可有相違候

相違あるべからず候

④ 李下不正冠

李下に冠を正さず

⑤ 百聞不知一見

百聞は一見に如かず

四 次の各文を「読み下し文」にして下さい。

① 被_二仰付_一候間、其旨承知可_レ仕候

② 無_二遲滞_一可_二相勤_一様可_レ被_レ達候

③ 無_二甲乙_一令_二割賦_一候